

日本社会福祉教育学会

NEWS LETTER NO. 23

Japanese Society of Social Welfare Education

事務局 〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1 東北公益文科大学 小関研究室気付

Tel 0234-41-1288 E-mail : info@jsswe.org <http://jsswe.org/>

2014年11月15日発行

目次

- | | |
|---|---|
| 1. 巻頭言・・・・・・・・志水 幸・・・・・・・・(1) | 6. 学会探訪⑩日本介護福祉教育学会・・志水 朱・・・・(15) |
| 2. 第10回鹿児島大会・・・宮嶋 淳、中山慎吾・・・・(2) | 7. 学会課題研究関連情報・「2014年度高等教育開発
フォーラム」報告・・・・平澤一郎・・・・(16) |
| 3. 2014年度総会報告・・・・・・・・事務局・・・・(4) | 8. お知らせ他・・・・小関久恵、嘉村 藍、早川 明
村山くみ、宮本雅央、山下匡将、原田聖子・・・・(17) |
| 4. 新理事の声～自己紹介と抱負・・小山 隆、白川 充
益満孝一、竹中麻由美・・・・・・・・(13) | 9. 編集後記・・・・・・・・宮嶋 淳・・・・(18) |
| 5. 春の研究集会・・・・・・・・事務局・・・・(15) | |

1. 〈巻頭言〉

社会福祉教育研究の射程と本学会の意義

会長 志水 幸 (北海道医療大学)

この度、初代会長の故・宮田和明先生、第二代会長の川延宗之先生の後を受け、日本社会福祉教育学会の第三代会長を拝命した北海道医療大学の志水幸と申します。浅学菲才ではございますが、本学会のさらなる発展のため、盤石なる礎を築くべく尽力いたしますので、会員の皆様の絶大なるご協力を賜れば幸いです。

翻って、日本社会福祉教育学会は、2005年10月31日(文京学院大学)に設立された比較的若い学会である。学会創設のための発起人による設立趣旨には、「社会福祉やソーシャルワークの『危機』の時代において、実践・理論・教育・研究・教育の改革・再編が求められています。社会福祉の政策と実践を短期・長期に展望するためには実践や研究への有能な人材を育て上げなければなりません。—中略—社会福祉の危機を克服すべく有為な人材を組織的に養成するためにも、社会福祉教育の責任の重さを感じ、社会福祉領域における教育学会の設立を提案する」と記されている。爾来十年、社会福祉やソーシャルワークの危機は去ったのだろうか。いや増して、“混迷の度合いを深めている”というのが衆目の一致した見解であるといっても過言ではない。かつて、一番ヶ瀬康子(1971)は『現代社会福祉論』(時潮社)の中で、わが国における「社会福祉学への志向は、当初社会事業に従事する従事者養成の教育機関からはじまった(傍点著者)」(7頁)と指摘されている。つまりは、社会福祉に係る学的探求の原点に教育があったということである。その発祥の歴史に鑑み、

混迷の時代を切り拓く上で、教育の果たすべき使命は大であるといわなければならない。

さて、本学会第2回総会（同志社大学）における学会規約の制定に係る案件の中で、名称にある「社会福祉教育」とは何を意味するのかを巡る議論があったことを記憶している。そこで、本学会の研究対象は、「高等教育における社会福祉専門教育」であるとの認識で一応の合意をみた。しかし、ここには二つのアポリアがある。一つは高等教育の範囲の難問である。一口に高等教育といっても、専門学校教育、短期大学教育、大学教育および大学院教育と、目的の異なる多くの教育機関によって展開されているものである。いま一つは、何を以て専門教育とするのかの難問である。一般に、社会福祉専門教育は、専門職養成を前提とする教育と、必ずしも専門職養成を前提としない教育に大別される。また、専門職養成を前提とする教育の中でも、資格取得に着目した場合には、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士の多様な教育課程が存在する。さらに、〔一社〕日本社会福祉教育学校連盟におけるコア・カリキュラムの議論は、資格取得を前提とする教育の範囲を凌駕する視野をもって専門職養成について語られている。高等教育機関における社会福祉専門教育の実体は、ことほど左様に複雑なものである。他方、これらに係る議論の場という問題もある。わが国における教育研究は、〔一社〕日本社会福祉学会をはじめ関連学会の中でも展開されてきた。また、特定の資格養成に特化した教育機関による団体や、わが国の社会福祉教育のナショナル・センターとしての学校連盟の場における議論がある。誤解を恐れずに言えば、このような状況の中で本学会の立ち位置を問うことは、ある意味で愚問であるともいえよう。

本来、学問や研究のための組織である学会は、制度的な軛や権力から自由であらねばならず、さらに言えば社会とのある種の緊張関係が必要とされる。そのことが学問の独立性・自律性を担保する前提でもある。本学会の存在意義は、その地平から先述の複雑な状況を俯瞰し、ある時には相互に独立した事象を繋ぎ、ある時には整序しつつ社会福祉教育の発展に寄与することである。とりわけ、本学会会則第3条に規定される、社会福祉教育実践・研究の水準の向上に資するべく、教育法・教授法等の開発が本学会の生命線となる。

かつて、ティトマス（1968=1971）は、『COMMITMENT TO WELFARE（三浦文夫監訳：社会福祉と社会保障 - 新しい福祉をめざして）』（東京大学出版会）の中で、「情報過多、情報の集積、実証的研究、検証されていない（またおそらく検証できない）仮説といったもののなかで、いかにして教え、何を選んで教えるかという問題が、より複雑なものになっているのである。要するに現在、私たちは情報を教えることに浮身をやつしたり、将来の見通しと原理を結合するという想像力を刺激する点では、教え方が足りないということになっているのかもしれない（括弧内著者、傍点引用者）」（11頁）と自戒している。まさに、今日でも色褪せることのない教育研究への示唆である。最後に、ティトマスが同書で引用したホワイトヘッド（1929=1986）の『教育の目的』（松籟社）における箴言を引用し、結びの言葉としたい。文中の「大学」を「教育」に置換することにより、より味わい深いものとなる。

「この世界の悲劇は、想像力豊かな人々が経験に乏しく、逆に経験豊かな人々には想像力が乏しいということである。愚者は知識をもたないで空想にふける。

学を銜う者は想像力をもたずに知識にたよる。

大学の使命は、この想像力と経験を融合させることにあるのである」

2. 第10回鹿児島大会

社会福祉士養成課程の改正について検証する(3)

ーこれからのソーシャルワーカー像を考える前提としてー

2014年8月23～24日にかけて、鹿児島県霧島において第10回日本社会福祉教育学会が開催されました。大会の詳細は、本学会研究誌に収録される予定で作業が進められていますので、そちらをご覧ください。ここでは大会スケジュールに即して大まかな出来事を紹介します。

まず川廷会長は「今回は第10回大会であり、ある意味で一つの区切りになる。第5回まで社会福祉教育セミナーと共に歩んできた。学会というよりも研究会のような雰囲気と内容で、合宿形式+参加型で行うことにした。こういうやり方、特徴の出し方もあるだろうと考えている。」という趣旨の挨拶をされました。

総会への参加者は22名でした。議長には宮本会員（群馬医療福祉大学）が拍手で承認され選出されました。

第1・2号議案については文言の一部修正が指摘された後、拍手で承認されました。

第3・4号議案については質疑なく、拍手で承認されました。

第5・6号議案については、会員による自主的な研究への助成について質問が出され、今後、次の執行部で検討していくことになりました。

第7号議案の地域ブロックについては、将来的には何らかの活動を期待していると、執行部より答弁がありました。また、事務局員は「すべてボランティアである」という説明がありました。



議事説明する原田事務局長と議長



新会長に就任した志水会員は「会員確保と学会が会員に提供する情報等の整備—例えば、学会研究誌のISSNの取得、学会連合への加入を進め、社会福祉教育という枠組みでのさらなる本学会の発展の方向性の検討」を進めたいと挨拶されました。

←新理事一同と挨拶する
志水新会長

年次総会の後、シンポジウム「社会福祉士養成課程の改正について検証する(3): 大学における専門職養成教育—ループリックの到達点—2013年度分散会をふりかえる」が行われました。

シンポジウムの冒頭、川廷会長から教育講演が行われました。



教育講演を行う川廷会長

本学会は2年前から「ソーシャルワーク教育の科目ごとのループリックづくり」を研究しており、シンポジウムでは科目「現代社会と福祉」「社会調査の基礎」「相談援助の基盤と専門職」「児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度」「精神保健福祉に関する制度とサービス」のコーディネーターを務めた本会理事から昨年度の大会以降、会員の共同研究として進めてきた各科目のループリック作りに関する進捗状況が報告されました。

報告する理事各位→



続いてワールドカフェ形式で分散会が開催され、具体的なルーブリック作りを2日間にわたり実施しました。



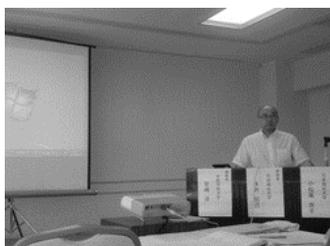
←作業を進める参加者→



ワールドカフェ第3分科会に参加して

中山慎吾（鹿児島国際大学）

ワールドカフェではカフェのようなリラックスした雰囲気の中で、これまで学会で作成したルーブリックの修正や展開に関する議論がなされました。第3分科会は、大学卒業後に子どもへの支援に関わるソーシャルワーカーとして働くために身につけるべき知識や能力に、焦点を合わせたものでした。そのようなルーブリックは、特定の1科目に関するルーブリックとは若干異なる性格をもったものだと思いました。他の分科会でもそうだったと思いますが、“各学生の学習達成度の評価基準”という点に限定せず、より広い活用の可能性を探る議論となっていました。先生方の穏やかながらも熱く刺激的な発言は、様々な関心や連想をかきたてられるものでした。例えば、子どもが“生きる”とはどういうことかといった、シンプルだけれど多角的で謎を含んでいるような問いかけに、その学生なりの答えを見出そうとするのは、大学の4年間をかけて取り組むに値することなのかもしれないと感じました。また、ソーシャルワークにおいては現代でも貧困や階層問題の重みを念頭におくべきだと、あらためて実感できた気がします。多様な意見が出される中、コーディネーターの先生方のおかげで、セッションの流れには気がつくともまとまりが生まれていました。安心して意見を出し合える雰囲気は、議論が苦手な私にとっても居心地がよく、自分なりに多くの刺激と宿題を得ることができ、感謝しております。



2日目の午前中は、自由研究発表の時間が設けられ、少人数ではありましたが、有意義な実践系の研究発表がなされました。

←口演の様子 最優秀演者賞を受け取る小松尾会員（日本福祉大）→



最後に2日間にわたる議論の成果を分科会ごとに発表しました。



3. 日本社会福祉教育学会 2014 年度総会報告

日時 2014 年 8 月 23 日 (金) 12:50~13:50 会場 霧島ロイヤルホテル

川廷会長の挨拶のあと、総会議長の選出を行い、宮本雅央会員が選任された。出席会員数は 21 人であった。次の議題について議事をおこない、承認された。

1. 第 1 号議案 2013 年度 事業報告(案)
2. 第 2 号議案 2013 年度 決算報告(案)および監査報告
3. 第 3 号議案 2014 年度 事業実施中間報告 兼 補正事業計画(案)
4. 第 4 号議案 2014 年度 補正予算(案)
5. 第 5 号議案 2015 年度 事業計画(案)
6. 第 6 号議案 2015 年度 予算(案)
7. 第 7 号議案 執行部の新体制(案)

つづいて次の報告をおこなった。

- 8 課題研究
- 9 特別研究プロジェクト
- 10 名誉会員について

第 1 号議案 2013 年度 事業実施報告

1. 理事会・事務局関係

1-1. 総 会

日 時：2013 年 8 月 31 日 (土) 13:30~14:30

会 場：丸紅多摩センター研修所 出席会員数：33 人

議 決 項 目：2012 年度の事業報告、決算報告、監査報告／

2013 年度の補正事業計画、予算／2014 年度の事業計画、予算

1-2. 理 事 会

第 1 回 2013 年 4 月 14 日(日) 於.大妻女子大学千代田校舎

第 9 回大会運営・内容／春季集会終了報告／

2012 年度補正事業計画執行状況報告、予算執行状況報告、課題協議／入退会関連

第 2 回 2013 年 7 月 5 日(金) 書面理事会・・・入会審査

第 3 回 2013 年 8 月 30 日(金) 於.丸紅多摩センター研修所

第 9 回大会準備報告／総会議案／入会審査内規／学会誌投稿規定／福祉系学会連合・監事／

学会規約の改定／入退会関連

第 4 回 2013 年 12 月 10 日(火) 書面理事会・・・入会審査

第 5 回 2014 年 2 月 22 日 (土) 17:00 ~21:20 於.大妻女子大学千代田校舎

NL 関連／学会誌編集規定／第 10 回大会運営・内容検討／学会誌 ISSN 登録承認／

理事・監事会選挙日程確認／入退会関連／名誉会員推挙確認／役員切り替え時期の検討

1-3. 会員状況 (2014 年 3 月 31 日時点)

会 員 数 219 名

新入会員 16 名(理事会承認…第 1 回 2 名、第 2 回(書面)7 名、第 3 回 3 名、第 4 回(書面)1 名、第 5 回 3 名)

退会者数 13 名(理事会確認…第 1 回 2 名、第 3 回 3 名、第 5 回 2 名、自動退会者 7 名)

2. 研究関連

2-1. 第 9 回大会

日時：2013 年 8 月 31 日 (土) ~9 月 1 日(日) 会場：丸紅多摩センター研修所

内容：ワークショップ 1「講義科目を学生参加型で運営するためには

～IT を使わずに、授業準備をあまり行わずに～」川廷宗之(大妻女子大学)

ワークショップ 2「統計感覚を身につけるために」杉山克己(青森県立保健大学)

山下匡将(名古屋学院大学)

問題提起「ルーブリックを活用した教育課程開発の試み」

分散会 I～III/分散会報告会/自由研究発表/自由研究発表大会賞授与

	分散会	コーディネーター
1	現代社会と福祉	志水・横山
2	社会調査の基礎	高橋・杉山
3	児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度	宮嶋
4	精神保健に関する制度とサービス	長崎
5	相談援助の基盤と専門職	小山・保正
6	地域福祉の理論と方法	川廷
7	介護の基本	渡邊・嵩末

2-2. 第4回春季研究集会

日 時：2014年2月23日(日) 10:30～16:00

会 場：大妻女子大学 千代田キャンパス 参加者：38名

主 催：日本社会福祉教育学会/日本社会福祉士養成校協会 関東甲信越ブロック

テーマ：社会福祉教育研究におけるルーブリック評価の活用

第I部 教育講演「多文化共生社会の創造と開発教育の意義」

田中治彦(上智大学 総合人間学部)

第II部 シンポジウム「ソーシャルワークの国際定義の見直しと社会福祉教育の行方」

シンポジスト 岡田まり(立命館大学)

秋元 樹(日本社会事業大学)

岡本民夫(同志社大学)

コーディネーター 志水 幸(北海道医療大学)

コメンテーター 田中治彦(上智大学)

2-3. 課題研究

No.	テーマ	研究代表	研究期間(予定)	備考
3	国際比較研究	小山、保正	2011～2013年度	継続3年目・完了
4	歴史研究	川上、志水、横山	2012～2014年度	2年目
5	教育評価	宮嶋、杉山	2013～2015年度	1年目

*テーマ1・2は前年度までに終了。

2-4. 特別研究プロジェクト … 詳細は別添資料ご参照

3. 学会誌

第9・10号合併号 2014年3月発行 150頁

第3回春季研究集会報告 特集「職業人養成としての福祉教育の課題」 論文 研究ノート 他

4. ニュースレター

4月 NL第17号発行

巻頭言：岡本監事、第3回春季研究集会報告、第9回大会予告

学会探訪⑥日本福祉図書館学会、投稿：私の福祉教育

7月 NL第18号発行

巻頭言：保正理事、第1回理事会報告

学会探訪⑦日本教育医学会、この一冊、私が推薦します、投稿：私の福祉教育

10月 NL第19号発行

巻頭言：福山監事、第9回大会報告、第2・3回理事会報告、総会報告

学会探訪⑧日本福祉マイクロカウンセリング学会、投稿：私の福祉教育

1月 NL第20号発行

巻頭言：横山理事、2013年度全国社会福祉教育セミナー報告、第4回春季研究集会予告、学会
探訪⑨日本社会保障法学会、投稿：私の福祉教育

*その他メールマガジンを発行した。

5. 渉外関連・・・川上理事が日本社会福祉学系会連合の監事を務めた。

第2号議案 2013年度 決算報告(案)および監査報告

収入の部(2014年3月31日現在)																												
収入費目	当初予算①	補正予算案②	決算③	差額③-②	備考																							
a 会費	1,792,000	1,708,000	1,602,000	-106,000	過年度未納分の追納を含む																							
b 研究集会	50,000	50,000	38,000	-12,000	参加費1,000円×38人																							
c 共催費	200,000	100,000	369,534	269,534	社養協・学校連盟関東甲信越ブロックより																							
d 雑収入	10,000	10,000	84,710	74,710	大会返戻金81556, 利息54, その他3100																							
e 前年度繰越	350,000	886,132	886,132	0																								
計	2,402,000	2,754,132	2,980,376	226,244																								
支出の部(2014年3月31日現在)																												
支出費目(案)	当初予算④	補正予算案⑤	決算⑥	差額⑥-⑤																								
A 大会助成費	300,000	400,000	400,000	0	大会第9回大会																							
B 研究集会費	200,000	150,000	386,384	236,384	学会誌掲載原稿作成費用を含む																							
C 学会誌発行費	500,000	400,000	357,085	-42,915	第9・10合併号分																							
D 課題研究費	300,000	300,000	133,330	-166,670	学会指定研究																							
K 特別研究費	150,000	150,000	152,201	2,201	ループリック調査研究費																							
E 理事会費	250,000	400,000	373,259	-26,741																								
F 事務費	230,000	200,000	201,382	1,382	紙代、発送費、アルバイト代等																							
M NL等発行費	0	180,000	165,711	-14,289																								
G HP・PR費	20,000	50,000	7,080	-42,920																								
H 選挙費	0	0	0	0																								
I 渉外費	20,000	20,000	30,420	10,420	福祉系学会連合会費																							
J 予備費	320,000	504,132	773,524	269,392	年度繰越																							
小計	2,290,000	2,754,132	2,980,376	226,244																								
L 年度繰越	112,000	0	0	0																								
支出 合計	2,402,000	2,754,132	2,980,376	226,244																								
<table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="2"></th> <th>2012年度末 (2013年4月15日)</th> <th>2013年度末 (2014年3月31日)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="6">残金</td> <td>ゆうちょ銀行</td> <td>201,303</td> <td>725,919</td> </tr> <tr> <td>三菱東京UFJ</td> <td>15,962</td> <td>15,964</td> </tr> <tr> <td>会費収納口座①</td> <td>431,349</td> <td>71,349</td> </tr> <tr> <td>会費収納口座②</td> <td>0</td> <td>32,000</td> </tr> <tr> <td>川廷研究室預り</td> <td>237,518</td> <td>-71,708</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>886,132</td> <td>773,524</td> </tr> </tbody> </table>								2012年度末 (2013年4月15日)	2013年度末 (2014年3月31日)	残金	ゆうちょ銀行	201,303	725,919	三菱東京UFJ	15,962	15,964	会費収納口座①	431,349	71,349	会費収納口座②	0	32,000	川廷研究室預り	237,518	-71,708	計	886,132	773,524
		2012年度末 (2013年4月15日)	2013年度末 (2014年3月31日)																									
残金	ゆうちょ銀行	201,303	725,919																									
	三菱東京UFJ	15,962	15,964																									
	会費収納口座①	431,349	71,349																									
	会費収納口座②	0	32,000																									
	川廷研究室預り	237,518	-71,708																									
	計	886,132	773,524																									

第3号議案 2014年度事業実施中間報告 兼 補正事業計画

1. 理事会・事務局関係

1-1. 総 会

日 時：2014年8月23日(土) 12:50～13:50

会 場：霧島ロイヤルホテル

議 決 項 目：2013年度の事業報告、決算報告、監査報告／

2014年度の補正事業計画、予算／2015年度の事業計画、予算 ほか

1-2. 理 事 会

第1回 2014年4月5日(土) 書面理事会 ……入会審査

第2回 2014年6月23日(水) 書面理事会 ……入会審査

第3回 2014年8月22日(金) 於.霧島ロイヤルホテル 総会議案／第10回大会運営準備

第4回 2015年2月21日(土) 於.大妻女子大学 千代田キャンパス

1-3. 会員状況 (2014年8月22日時点)

会 員 数 212名(名誉会員移行見込者3名を含む)

新入会員 9名(理事会承認…第1回(書面)1名、第2回(書面)7名、第3回1名)

退会者数 16名(理事会確認…第3回6名、自動退会10名)

2. 研究関連

2-1. 第10回大会

日時：2014年8月23日(土)・24日(日) 会場：霧島ロイヤルホテル

内容：シンポジウム「社会福祉士養成課程の改正について検証する(3)

大学における専門職養成教育—ルーブリックの到達点、2013年度分散会を振り返る」

①「現代社会と福祉」と「社会福祉調査」 担当コーディネーター 志水幸・杉山克己

②「相談援助の基盤と専門職」 担当コーディネーター 保正友子・小山隆

③「児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度」 担当コーディネーター 宮嶋淳

総合コーディネーター 川廷宗之

ワールドカフェ 第1～3セッション／ランプセッション／自由研究発表／大会賞表彰

2-2. 第5回春季研究集会

日 時：2015年2月22日(日) 10:30～16:00 於.大妻女子大学 千代田キャンパス

会 場：大妻女子大学千代田キャンパス

2-3. 課題研究

No.	テーマ	研究代表	研究期間(予定)	備考
4	歴史研究	川上、志水、横山	2012～2014年度	2014年度で終了となる。
5	教育評価	宮嶋、杉山	2013～2015年度	第11回大会で発表を予定。
6	ITを活用した教育	長崎、川廷	2014～2016年度	継続して研究をおこなう。

*テーマ1～3は前年度までに終了。

2-4. 特別研究プロジェクト

3. 学会誌

第11号・・・2014年 10月 発行予定 …… 論文 実践報告 他

第12号・・・2015年 3月 発行予定 …… 論文 実践報告 他

4. ニュースレター

4月 NL第21号発行

巻頭言：宮嶋理事、第4回春季研究集会報告、第4・5回理事会報告

ルーブリック試案①(「現代社会と福祉」「精神保健福祉に関する制度とサービス」「相談援助の基盤と専門職」)、学会探訪⑩日本社会教育学会、投稿：私の福祉教育

7月 NL第22号発行

巻頭言：川廷会長、ルーブリック試案②(「社会調査」「児童・家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度」)、次期役員選挙の結果報告、第10回大会予告

学会探訪⑩日本保健医療社会学会、投稿：私の福祉教育

<今後の発行予定>

10月 NL第23号

巻頭言：志水理事、理事会・総会報告、第10回大会報告

学会探訪⑪日本介護福祉教育学会、投稿、事務連絡

1月 NL第24号

巻頭言：杉山理事、理事会報告、第5回春季研究集会予告

学会探訪⑫日本看護教育学会、投稿、事務連絡

*その他、メールマガジンの発行もおこなう。

5. 渉外関連

日本社会福祉系学会連合会の監事について、川上理事から保正理事に交替した。

第4号議案 2014年度 補正予算(案)					
収入の部(「中間決算」は2014年8月10日時点)					
収入の部	当初予算①	中間決算	補正予算案②	差額②-①	備考
					【予算】
					年会費8,000円×(219人×0.9)≒1,576,000
a 会費	1,606,000	1,242,000	1,606,000	0	入会費3,000円×10人
					【執行状況】
					過年度分:102,000円(@6,000×9人+@8,000×6人)
					当該年度分:114,000(142人。但し、金額間違いの人がいる)
b 研究集会・参加費	50,000	0	50,000	0	参加費1,000円×50人
c 共催費	50,000	0	200,000	150,000	共催団体は調整中
d 雑収入	10,000	0	10,000	0	利息等
e 前年度繰越	350,000	0	773,524	423,524	
収入合計	2,066,000	0	2,639,524	573,524	
支出の部(「中間決算」は2013年8月10日時点)					
支出費目	当初予算①	中間決算	補正予算案②	差額②-①	備考
A 大会助成費	300,000	300,432	310,000	10,000	第10回大会
B 研究集会	100,000	0	250,000	150,000	第5回春季研究集会
C 学会誌発行費	300,000	360	500,000	200,000	2回発行
D 課題研究費	300,000	0	240,000	-60,000	1課題研究80,000円×3研究
L 特別研究費	150,000	0	80,000	-70,000	
E 理事会費	250,000	7,920	250,000	0	
F 事務費	200,000	102,779	200,000	0	
M NL発行費	180,000	47,711	180,000	0	NLは発行年予定4回/学会誌、大会・春季集会の案内等の送料・発送作業料を含む
G HP・PR費	50,000	0	50,000	0	
H 選挙費	50,000	39,161	40,000	-10,000	
I 渉外費	20,000	30,126	35,000	15,000	
J 予備費	166,000	0	504,524	338,524	
支出合計	2,066,000	528,489	2,639,524	573,524	

第5号議案 2015年度 事業計画

1. 理事会・事務局関係

1-1. 総 会 大会開催期間中に実施

1-2. 理 事 会 対面理事会:8月、2月の計2回 その他、書面理事会及び理事懇談会を適宜おこなう。

1-3. 会員状況 会員数の拡大を目指す。

2. 研究関連

2-1. 第11回大会

開催予定日:2015年8月22日(土)・23日(日) … 予定

会 場:東北公益文科大学 内 容:検討中

2-2. 第5回春季研究集会

開催予定日:2016年2月22日(日)

会 場:検討中 内 容:検討中

2-3. 課題研究

No.	テーマ	研究代表	研究期間(予定)	備考
5	教育評価	宮嶋、杉山	2013～2015年度	
6	ITを活用した教育	長崎、川廷	2014～2016年度	

*テーマ1～4は前年度までに終了(予定を含む)。

3. 学会誌

第13号・・・2015年 10月 発行予定・・・論文 実践報告 他

第14号・・・2016年 3月 発行予定・・・論文 実践報告 他

4. ニュースレター

4月 NL第25号

7月 NL第26号

10月 NL第27号

1月 NL第28号

} 引き続き、年4回発行予定。
会員からの投稿、情報提供、随時募集する。

<検討課題>

1) 第24号以降の巻頭言の執筆予定者 2) 学会探訪の今後の予定

5 渉外関連(保正)

第6号議案 2015年度 予算

		2013年度 決算	2014年度 (補正)予算	第6号議案 2015年度 予算	備考
収入の部	a 会費	1,602,000	1,606,000	1,614,000	年会費8,000円×(220人×0.9)=1,576,000 入会費3,000円×10人
	b 研究集会・参加費	38,000	50,000	50,000	参加費1,000円×50人
	c 共催費	369,534	200,000	200,000	共催団体は調整中
	d 雑収入	84,710	10,000	10,000	利息等
	e 前年度繰越	886,132	773,524	504,524	
	収入合計		2,980,376	2,639,524	2,378,524
支出の部	A 大会助成費	400,000	310,000	300,000	第11回大会
	B 研究集会	386,384	250,000	250,000	第6回春季研究集会
	C 学会誌発行費	357,085	500,000	500,000	発行予定2回
	D 課題研究費	133,330	160,000	160,000	1課題研究80,000円×2研究
	K 特別研究費	152,201	80,000	0	
	E 理事会費	373,259	250,000	200,000	対面理事会2回(大会・研究集会の開催日の前日)、書面等理事会
	F 事務費	201,382	200,000	200,000	
	M NL等発行費	165,711	180,000	180,000	「NL等発行費」は、2013年度補正予算より創設/NL発行は年4回予定。学会誌、大会・春季集会の案内等の送料・発送作業料を含む。
	G HP・PR費	7,080	50,000	50,000	
	H 選挙費	0	40,000	0	
	I 渉外費	30,420	35,000	35,000	
J 予備費	773,524	584,524	503,524		
支出合計		2,980,376	2,639,524	2,378,524	

第7号議案 執行部の新体制

担 当		氏 名		
理事	会 長	志水 幸 ＜北海道／北海道医療大学＞		
	副会長	【研究・渉外 統括】 川廷 宗之 ＜関東甲信越／大妻女子大学＞		
		【事務局・学会誌・NL 統括】 小山 隆 ＜近畿／同志社大学＞		
	学会誌担当	杉山 克己 ＜東北／青森県立保健大学＞	益満 孝一 ＜九州／筑紫女学園大学＞	
	研究担当	白川 充 ＜東北／仙台白百合女子大学＞	川島 恵美 ＜近畿／関西学院大学＞	
	NL 担当	宮嶋 淳 ＜東海北陸／中部学院大学＞	竹中麻由美 ＜中国四国／川崎医療福祉大学＞	
	渉外担当	保正 友子 ＜関東甲信越／立正大学＞		
監 事		福山 和女 ＜ルーテル学院大学＞	笛木 俊一 ＜日本福祉大学＞	
事務局	事務局長	小関 久恵 ＜東北公益文科大学＞		
	事務局員	村山 くみ ＜東北福祉大学＞	嘉村 藍 ＜仙台白百合女子大学＞	宮本雅央 ＜群馬医療福祉大学＞
		山下 匡将 ＜名古屋学院大学＞	早川 明 ＜秋田看護福祉大学＞	原田 聖子 ＜江戸大学総合福祉専門学校＞

8. 課題研究

3. 「ソーシャルワーク教育の国際比較研究」

担当：小山 隆、保正 友子

	事業報告／事業計画(案)
2013 年度 事業計画報告	福祉教育学会誌に掲載するための論文の構想を練り、執筆分担を行い、各自が執筆に取り組む。

4. 「歴史研究」

担当：川上富雄、志水幸、横山豊治

	事業報告／事業計画(案)
2013 年度 事業報告	本学会第9回大会で次について報告をおこなった。 「戦後の社会福祉教育の変遷 - 東洋大学の社会福祉教育史に関する第二報 -」（報告者：横山豊治）
2014 年度 補正事業計画 (案)	これまでの研究の成果を論文としてまとめる。

5. 「教育評価研究」

担当：宮嶋 淳、杉山克己

	事業報告／事業計画(案)
2013年度 事業報告	本学会「特別研究プロジェクト」において、社会福祉教育における評価方法としての「ルーブリック」研究がとりあげられている。このことに関連して、本年度の当該研究は他領域の教育評価の方法のレビュー、あるいは海外のソーシャルワーク教育の調査を、担当理事並びに研究参加意向を示された会員により、分担研究を行うこととする。
2014年度 補正事業計画 (案)	① 前年度の分担研究の成果をもちより、学術的ミーティングを行う。 ② ①の議論を踏まえて、当該年度の研究方針・計画・進捗管理を構築する。 ③ 当該年度の分担研究の成果をもちより、次年度の研究目標を明確化する。
2015年度 事業計画 (案)	指定研究のタスクゴール年度として、何らかの成果を公表する。

6. 「ITを活用した教育」

担当：川廷宗之、長崎和則

	事業報告／事業計画(案)
2014年度 補正事業報告 ・計画(案)	○現在までのCAIやIT活用の学習に関する研究に関しての先行研究に関しての点検を行う。(点検としては、「高等教育における」と「福祉に関する教育」の二つの焦点で研究調査を行う。) ○今後の研究課題を整理する。 a. CAIにおける「復習学習」支援から「予習学習」への転換について(反転授業を視野に入れて) b. 放送(Web授業を含む)活用の学習支援の状況やその効果について c. IT機器を活用した授業開発にかんして、教育実践への組み込み状況等を調べると共に、効果的な活用方法の研究を計画する d. ロボットなどを活用した体験学習について(会話ロボットや介護ロボットを含む) e. SNSを活用した授業 f. その他 ○研究チームを編成する。
2015年度 事業計画 (案)	○上記a～eの研究課題について、それぞれ ① 現実の授業への影響 ② 現実のa～eの実践に関する改善すべき課題 ③ 実際の授業への効果的に活用方法 に関し研究を進める。
2016年度 事業計画 (案)	○研究成果を公開する ① a～eに関する研究成果を公開する。 ② 本学会HP内に、ITを活用した教材提供ページを創り、会員の教育活動への支援を行う。 ③ 福祉を学ぶ学生向けの福祉教材に関するページを創って公開していく。 ④ 研究としては一度取りまとめ終結する。資料提供システムとの継続方法など、今後の課題を整理する。

9. 特別研究プロジェクト

担当理事：川廷宗之

	事業報告／事業計画(案)
2013年度 事業報告	① 目的・・・詰め込み教育に陥りがちな大学等における専門職教育を見直し、「実践場面での援助行動を行える」力量を持つように養成教育を行っていくためのルーブリックを有志会員が自力で開発できるようになること。その力量を活用しつつ、実践力を重視する方向で、社会福祉士養成教育に関する教育計画を、ルーブリックを使って検討し、幾つかの科目について、科目ルーブリック試案をまとめ、今後の改善に向けて問題提起をしていく。 ② 当面の目標・・・いくつかの科目に関して、当該科目内容に関する研究グループを作り、大会等で協議を行うと共に、年度末までに社会福祉士養成教育科目全部に関して、それぞれの研究グループを創る予定であったが、そこまでは進められなかった。 ③ 課題・・・それぞれの研究グループが、科目ルーブリック試案を提示する段階まで進める予定であったが、一部科目について、学会NL紙上で公開するに留まった。 ④ 実現のための取り組み方法・・・まずは会員内で科目ごとの研究グループを組織する予定であったが、組織化かは進んでいない。 ⑤ 実施状況の判定基準・・・④の内容の進行状況で判定し、2014年度の活動内容に反映する ⑥ 実績・・・会員への呼びかけを行って担当科目調査を進めている。7月6日に担当理事を中心にルーブリックに関する学習会を行った。その後大会でとりあえずそれぞれの分科会

	レベルでまとまった内容をNLに掲載した。
2014年度 補正事業計画 (案)	①目標・・昨年度の大会における科目ごとの研究グループでのとりまとめの整合性を図り一つのまとまった資料としてまとめる。 ②課題・・参加する会員を増やし、本学会の総意とする働き掛けが必要である。また、科目ごとの検討となっているため、カテゴリー単位や基本方針などに関しても検討が必要である。 ③社会福祉士養成教育に関する教育課程以外にも、コア・カリキュラムなどいくつかの福祉教育の教育課程が提案されている。これらの学習課題に関しても目配りが必要である。

10. 名誉会員

本学会会員である次の3名について、社会福祉教育学界への貢献が顕著であると認め、名誉会員とする。

- 1.太田 義弘 氏 2.大橋 謙策 氏 3.岡本 民夫 氏

4. 新理事からのメッセージ

今回、本学会の役員体制が変わり、志水先生が会長につかれました。それに当たって、川廷会長が副会長として新体制を支えられることとなり、僕もそのお手伝いをさせていただくこととなりました。新会長が詳しい所信表明をなさるとは思いますが、理事会の中での役割を果たさせていただく者としての思いを一言申しあげます。

本学会は新しい学会です。そして、ソーシャルワーク領域であれ福祉政策領域であれ、福祉研究者と呼ばれる者の多数が大学等で教育に関わっているという現実からすれば、本学会はすべての福祉系研究者が参加すべき学会であると（大風呂敷を広げるならば）言えるでしょう。

研究者が実践にコミットすべきであるということに関して「リサーチャー＝プラクティショナー」という言葉がありますが、その意味では「リサーチャー＝エドゥケーター」ということでしょう。

幸いなことに、我々は福祉教育分野での知見だけでなく、その地の高等教育分野における知見も吸収できる立場にあります。よりよい「リサーチャー＝プラクティショナー＝エドゥケーター」であるために、本学会を大いに活用していただきたいと思います。それに値するプログラムの提供に理事会としても努めていきたいと思っています。

そしてさらにもっと加えるとするならば、学会に対して「コンシューマー」としてだけでなく「コ・プロデューサー」として、ぜひ関わっていただきたいと思っています。といっても難しいことはありません。提供されるサービスを利用するだけでなく、こんなことについて学びたいといった要望や、こんな情報があるよといった情報を会員一人一人が発信するだけでも学会は活性化するでしょう。学会の主体的運営に参加のお願いをします。

p s (冗談めかした切実なお願い) 会員増にもご協力を！

小山 隆 (同志社大学)

このたび、新執行部体制の理事（研究担当）となりました。まだ理事会に出席していないので、具体的にはどのような仕事を行えばよいかわからない点が多々あるのですが、川島担当理事と、副会長として研究・渉外を総括される川廷理事とともに、取り組んでいきたいと思えます。

日本社会福祉教育学会としては、この数年、ループリック研究を行っていたようですが、新体制ではどのような研究課題を設定されるのか、まずは志水会長の構想をお聞きしたいと思います。私個人は、過去において、学校連盟の社会福祉専門教育委員会のメンバーとして「コア・カリキュラム構想」に参画し、ここ1～2年は科研等を通して、福祉専門職養成教育と福祉教育モデル・コア・カリキュラム研究、CBTとOSCE開発に取り組んでいます。ただこれらの研究は、社会福祉教育の柱であってもすべてではないという立場です。

社会福祉教育に関する研究と実践は、実に多様な切り口と論点があり、それらを包括しながら、学会としての重点目標を踏まえたアカデミックな取り組みが必要であると考えております。どうかよろしく願いいたします。

白川 充（仙台白百合女子大学）

このたび、理事を担当させていただくことになりました。医療ソーシャルワーカー、介護支援専門員としての経験を活かして教員として活動しています。社会福祉士養成課程において、より専門性の高い実践力のあるソーシャルワーカーを養成するための方法及び教育の効果をどのように測定すればよいのか、また保健医療分野における多職種連携の中で、ソーシャルワーカーが発揮できる機能・役割について模索しております。

人生経験だけは、そこそこ積み上げてきたものの、教育者・研究者としては未熟者です。学会活動のお手伝いを通じて自らを成長させることが出来ればと考えております。微力ながら努力して参りますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

竹中麻由美（川崎医療福祉大学）

社会福祉の教育は新たな段階に入ったと実感します。周知のように認定社会福祉士の制度が開始され、その認定資格の要件であるスーパービジョンも実施され、私も福岡県でスーパーバイザーをすることになりました。専門制度の充実には欠かせないものですが、社会的認知も重要と思えます。というのも、社会福祉施設役職員研修会の受講生の職種は多岐であり、学歴も大卒だけでない状況です。社会福祉士の実務経験として認められる専門職の人材を考えると、研修による教育は大事だと痛感しています。多種多様な職種と「社会福祉士」の教育について、大学教育だけでなく、専門職領域における福祉教育の充実には本学会を通して少しでもお役に立てばと思えます。

益満孝一（筑紫女学園大学）

5. 第5回春季研究集会の開催について

現在、政府の高等教育政策の一環として、学士課程教育における分野別質保証に向けた取り組みが進行中です。われわれが関係する社会福祉学分野についても、2013年7月より2014年9月まで日本学術会議社会学委員会社会福祉学分野の参照基準検討分科会において、合計9回にわたる議論が行われています。

この参照基準の内容については、2014年7月21日に大正大学において開催された公開シンポジウムの議論を経て修正され、9月に報告（第2案）として取りまとめられています。報告（第2案）は、日本社会福祉系学会連合ホームページ（10月15日付け）により公表されています。また、11月2日に日本福祉大学において開催された全国社会福祉教育セミナーの特別シンポジウムでは、報告（第2案）をめぐる議論がおこなわれています。それらの議論を踏まえ、本年12月には機関承認の後に正式に公表される予定です。

そこで、第5回春季研究集会では、日本学術会議社会学委員会社会福祉学分野の参照基準検討分科会委員長の大任を担われた白澤政和先生をお招きし、社会福祉学分野の参照基準策の論点のみならず、今後の社会福祉教育研究における課題について教育講演を予定しております。

大勢の会員の皆様にお越しいただき、活発な意見交換の場となりますよう祈念しております。

[テーマ] 「社会福祉学分野の参照基準と今後の社会福祉教育研究の課題（仮題）」

[日 時] 2015年2月22日（日）10：30～16：00

[会 場] 大妻女子大学千代田キャンパス

[内 容] 午前：教育講演「学士課程教育における社会福祉学分野の参照基準と今後の教育・研究の課題」
講師 白澤政和先生（桜美林大学大学院 教授）

午後：シンポジウム（詳細については検討中）

[参加費] 1,000円（大学院生・学生は無料）

[申込方法] 学会ホームページ上での申し込みとなります。学会ホームページより必要事項を送信の上、当日会場へお越しください。学会ホームページ：<http://jsswe.org>

※電話、FAXなどの参加申し込みは受け付けておりません。開催会場の詳細（使用教室など）については、随時、学会ホームページに情報を掲載致します。

6. [学会探訪②]

介護福祉教育の専門性への模索を続ける日本介護福祉教育学会

志水 朱（北海道医療大学）

日本介護福祉教育学会の母体である介護福祉士養成施設協会は、平成元年24施設25学科によりスタートし、平成3年社団法人日本介護福祉士養成施設協会となり（平成25年4月より公益社団法人へと移行されている）、平成6年11月「日本介護福祉教育学会」が設立された。「日本介護福祉教育学会」は、介護福祉士の養成に関わる教育内容及び教育技術の学術的向上発展を推進し、会員相互の緊密な学問的交流並びに介護福祉教育の普及を通じ、国民福祉の増進に寄与することを目的とし、養成校教員の各々の研究成果の発表の場として位置づけられている。学会誌は中央法規出版より「学術集会(大会)の特集」(2月)と「投稿論文特集」(7月)で、年2回発行されている。そのほか日本介護福祉士養成施設協会では、教職員研修として、全国を7ブロックに分け、ブロックごとに毎年研修会を設け、また、年1回の全国教職員研修会を持ち回りで行っている。全国教職員研修会は基調講演等のほかワークショップを中心に行い、教職員のスキルアップを中心として行っている。

過去3年間の大会テーマを見ていく。「介護福祉士の未来展望～専門性の創造を目指して～」(2011年第18回盛岡医療福祉専門学校)、「介護福祉教育の正念場～生活支援の原点とは～」(2012年第19回神戸女子大学)、「未来を拓く介護福祉教育～社会への発信～」(2013年第20回福岡県介護福祉士養成施設協会)となっており、介護福祉教育そのものへの問いと専門性に対する模索が続いている。介護福祉士国家資格制度は、国の意向により資格取得方法が度々変わり、それに伴うカリキュラムの変更と国家資格以外の他の介護従事者を取り巻く資格制度や研修制度に翻弄されているともいえる状況下において、介護福祉教育とは何なのかを必死で模索している現状が浮かびあがる。

今年度の第21回日本介護福祉教育学会では、「改めて介護福祉教育の価値を問う～尊厳を重んじられる実践者養成～」(2014年第21回北海道医療大学)をテーマに、4分科会6会場で53名の研究発表が行われた。医療的ケアの科目がスタートし、尊厳とは何かをより深く思考することを期待されている昨今、基調講演として「長寿時代のエンド・オブ・ライフ・ケア」会田薫子氏、教育講演は「認知症の人の尊厳ある食事を支援するために」山田律子氏、シンポジウムでは「食から考える尊厳」をテーマに武田純子氏、五十嵐あけみ氏の実践報告、特別講演として「ケアに求められる倫理とは」三瓶徹氏よりご講演を頂き、それぞれの介護の実践場面から尊厳を考え、その尊厳を重視した実践者を養成することこそ介護福祉教育ではないかとの方向性が見られた。



現在、学術学会としての独立に向け準備が進んでおり、次年度からは日本介護福祉士養成施設協会が主導する形ではなく運営されていく予定である。それに伴い、会員も養成施設協会の教員だけではなく、広く一般の会員を募るなど様々な方法で、介護福祉教育の重要性を発信し、研鑽に努め社会に貢献していくよう検討されている。

7. 学会課題研究関連情報～教育評価研究の課題と展望～フォーラムに参加して

平澤 一郎 (長岡こども・医療・介護専門学校)

参加フォーラム

日本高等教育開発協会主催「第4回高等教育開発フォーラム」(会場：新潟医療福祉大学)

9月19日(金) セッションⅢ「シラバスとルーブリックの開発」

私は本学会に参加するようになり「ルーブリック」と初めて出会い、勉強するようになった時に、地元新潟での標記のフォーラムがあり、参加しない手はないと思い勇んで行って参りました。

内容としてはシラバスについて今一度その役割を振り返ってみた上で、ルーブリックとは何かを1から説明するといった内容でした。

シラバスに関しては必要とされる項目がその授業の「目的」「到達目標」ということでした。「目的」は山の頂上のように、「卒業後に学生がどうなっていて欲しいか」という全体の目的を示し、到達目標は「この授業では山のぼりの中でも何合目までを目指す」という区別をつけるべきとのことでした。個々の到達目標は各授業によってしっかり決められているものの、学科全体としての目的が果たして一致しているのかを各科目担当の教員全員の一致が求められるのではないかと感じました。

また、最近のシラバスの傾向として「ディプロマ・ポリシーとの関係」「授業の方法(最近アクティブ・ラーニングも増えているので)」「授業時間外の学習」という記載も増えているとのことでした。

ルーブリックに関しては、学生が到達目標を明確に出来るだけでなく、評価基準について学生に「なぜこの評価がBなのか」など説明できるという「説明責任」を果たす意味でも用いられるとありました。

また、ルーブリックを用いて、評価を明確にすることで、教員としては採点基準



が明確になるということだけではなく、何よりもレポート評価を素早く出すことが出来ることがメリットともありました。これは教員の労力を最大限抑えるという意味もあるでしょうが、何よりも学生に素早いフィードバックができ、学生の学びを促すという意味ではメリットかと思えます。

つまり、ルーブリックは最初に作成することが手間ではありますが、一度作ってしまえば、毎年それをブラッシュアップすることで、採点がかなり効率的になるとのことでした。

私の所属する保育科ではレポート作成が多いことから、今回学んだルーブリックが最大限活用できそうです。例えば、レポート課題を示す前に、ルーブリックを示すことで教員間でのレポート評価にバラつきもなくなります。例えば「誤字脱字がない」「引用方法がしっかりされている」など全科目を通じての評価を作っておき、1項目だけ空欄の評価項目を用意し、科目別で1つ評価基準を決めてもらうことも提案できるかと思えます。これを通し、学科としてのレポート基準の統一化も図れるのではないかと思います。

講師の先生も述べられていましたが、ルーブリックは教員と学生とのコミュニケーションツールであるとのこと。ルーブリックを用いることで、教員と学生、教員同士それぞれのコミュニケーションを円滑に行い、更なる学習効果を高めることができるのではないかと思います。

8. お知らせ

1) 『日本社会福祉教育学会誌』の公開

投稿規程、執筆要領は、2013年1月15日付けで発行された学会誌第7号の巻末に掲載されていますのでご参照下さい。(ニューズレターのバックナンバーは、学会のホームページで一部閲覧可能です)

⇒ <http://jsswe.org>

2) 《投稿募集》

ニューズレターでは、皆様の社会福祉教育に関する声を募集しています。原稿は随時募集していますので、学会事務局(本紙1頁タイトル部分に表記)までご投稿願います。

テーマ：社会福祉教育に関することであればテーマは自由です。例えば下記のようなテーマがお薦めです。 「社会福祉士のカリキュラムについて」「実習教育について」「福祉分野に行かない学生への対応について」「教科書の使い方について」「お薦めの教材について」「科目毎の教授法について」など。 締め切り：随時。ニューズレターへの掲載頃はこちらにお任せ願います。 字数：800～1,600字程度
--

3) 事務局から

○会費について

今年度および過年度分の会費について未納の方は、お振込みくださいますようお願い申し上げます。

○新事務局員から

この度、本学会の事務局長を仰せつかりました小関と申します。

私事ではありますが、大学教育に携わり10年の節目を迎える時期に、一会員として学ばせていただきながら、事務局としても学会活動の一端をお手伝いすることになり、大きな責任と喜びを感じております。

至らない点が多く、ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、皆様のご指導、ご協力を賜りながら努めて参りたいと存じますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

小関 久恵(東北公益文科大学)

このたび、本学会の事務局としての役割を仰せつかりました仙台白百合女子大学の嘉村です。

不勉強のため至らない点やご迷惑をおかけする点は多々あるかと存じますが、皆様から様々なことを学ばせていただき、微力ながら、努めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

嘉村 藍(仙台白百合女子大学)

新たな事務局員となりました、秋田看護福祉大学の早川明と申します。慣れない事務局の仕事でご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、学会の発展のため自分に出来る事を精一杯頑張ります。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

早川 明 (秋田看護福祉大学)

このたび事務局のお手伝いをさせていただきことになりました東北福祉大学の村山くみと申します。事務局に関わらせていただくのは初めての経験であり不安もありますが、事務局長のもと学会のさらなる発展と充実へ向けたお手伝いができるよう努力したいと思っております。不慣れなためご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、会員の皆様のご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

村山 くみ (東北福祉大学)

今期より事務局員を仰せつかりました群馬医療福祉大学の宮本と申します。学会の発展と会員の皆様へ有益な活動に繋がるよう、力を尽くしたいと思っております。会員の皆様のご指導のほど、よろしくお願い致します。

宮本 雅央 (群馬医療福祉大学)

この度事務局を務めることとなりました、名古屋学院大学の山下です。本学は社会福祉士の養成課程を閉じたため、現在は“福祉教育の場”としての大学の教壇に立っております。今後は、社会福祉教育に関する実践および研究全体を支える裏方として、学会に携わって参りますので、よろしくお願い申し上げます。

山下 匡将 (名古屋学院大学)

前事務局から引き続き、今期も事務局の一員を仰せつかりました原田です。新事務局は、小関事務局長をはじめ、若いエネルギーで、学会活動をさらに盛り立てていこうと頑張っております。私も微力ながら、お手伝いをさせていただきたいと思っております。引き続き、よろしくお願い申し上げます。

原田聖子 (江戸川大学総合福祉専門学校)

編集後記

鹿児島での第10回大会が無事に終了し、早くも2ヶ月が経過した。今号では、同大会・総会に関する報告と、今後の本学会の運営を担う新理事(=ここには新しく就任した者と前任期からの継続者を含む)並びに新事務局員の声を会員の皆様にお届けすることに重きをおいて編集した。当の私も引き続きNL編集を担当させて頂く。

私の地元では『中日新聞』(関東では『東京新聞』系列)が新聞シェアの約6割を占める。9月から11月の頭にかけて「大学」「社会福祉法人」にかかる特報が何度も組まれている。その見出しを抜粋して紹介してみたい。

・文科省から「天下り」幹部続々：国立大支配強まる恐れ、将来は文型廃止!? 現場反発「教養こそ実学」(9/2)
・大学の本质を否定する文科省：「知」より産業貢献に力(10/1) ・就職難続く「ポスドク」：進路支援、国や大学模索、年功序列、終身雇用の「壁」厚く(10/13) ・学生激減 大学淘汰の時代：郊外から都心回帰 支援した自治体困惑、2018年問題 特色づくり急務、「学士」続々 700種に、独自名、内容分かりにくく(10/15) ・大学中退：粗悪な学びの“安全網”(10/16) ・加速する「軍学共同」：学術界かすむ平和理念、政権の安保政策呼応(10/18) ・社福法人にメス 課税論浮上：巨額内部留保還元を、使命は社会貢献(11/1)

1990年代から2000年代初頭の「福祉系大学バブル」は、18歳人口200万人台に生まれた。そして2018年以降、18歳人口100万人弱の時代に突入する。そうした中、地方と都市圏の学生獲得競争の激化は避けられないと予想されている。現在でさえ「不人気」な社会福祉学はまさに生き残れるのか、生き残れるのはほんの一部の有力校と特色のある学科・コースということになるのだろうか。「分かりやすく、先駆的な、将来の見える学問」としての社会福祉学・ソーシャルワークを荒削りでも「今、魅せていく」必要があると思わざるを得ない。

基礎研究ではない社会福祉学・ソーシャルワークがこれからの10年をどう受け止めていくのか。それには時流に即して「生き残るため」の方策を思案するという方向性もあるだろう。だとすれば、「今」私たちはどのような学問と手を組み、協働して、何を拠り所として、研究・教育・実践をデザインしていけばよいのか、が課題になりそうだ。生き残りではなく「ミッション」を極めていくとすれば、どのような尺度を良とし活用することになるのだろうか。

川廷前会長のめざした「社会福祉学におけるルーブリックの完成」は、こうした疑問への一つの問いかけであったと受け止めている。その意味でも、本学会としての発信力を学術的に高めていく、そして時流という速度に即して、が求められているのではないだろうか。

(編集委員 宮嶋)